「家庭教育をどう模索するか」

ー親子での体験の場を通して何が育ったか　その2ー

園長　高杉美稚子

生まれてきた時から、過干渉や、過期待の育てられ方をした、子どもはどうなるのかの続きの話です。

親が子どもの為と思ってやってきた行為が過干渉や、過期待になるということに少し気付いていただけたようです。数年前にも5つの過ぎたるかかわりについても書きました。保護、過保護、過干渉、過期待、過放任、過許可はどう違うのでしょうか。以前に読まれた方もここで今一度振り返ってみたいと思います。

一言で言うならば、

保護とは、子どもが望んでいることを、望んでいるときに、望んでいるだけ与えること、

過保護とは、子どもは望んでいるけれど、子どもが自分でやろうとすれば、十分できることまで、安易にこちらが手を貸してやってしまうこと、

過干渉とは、子どもが望んでいないことやりすぎたり、やらせすぎたりすることです。

過期待とは、子どもが自分に期待するのではなく、子どもが出来る以上に親が望むこと、

過放任とは、子どもが望んでいる以上に放任する事、

過許可とは、子どもが望んでいないのに許可を与えること、

要するに、子どもが、そのことを望んでいるか、望んでいないか、がチェックポイントです。だから、親の肌感覚、感覚の鋭敏性がここでも大切になってくると思うのです。

「過ぎたる親のかかわり」を「成功する子育ての条件」では、このように述べています。

① 過保護とは、その根底に親の気分や、都合を優先させすぎる傾向があり、愛の押し付け、いわば、愛の一方通行となっているのです。具体的には「手のかけすぎ」となって現れます。その結果、最後まで自分でやり遂げたという「成就の喜び挫折の経験」の両方が少なくなります。うまくいかなければ、すぐ人に頼むような依頼心（依存心）の強いわがままの子になってしまいます。

② 過干渉とは、子どもに対する信頼感の不足が根底にあります。未発達であっても、一人の人間として信頼することが、人間関係の基本であることに気づいていません。更に、過干渉傾向の親は、神経質で、つい結果が気になってしまいます。具体的には、口の出しすぎとなって現れます。多くの場合、肝心なところで口を出すために、自分で選んだり、決めたりする体験が少なくなります。その結果、選択と決断の出来ない、人のせいばかりにする集中力のない子になってしまいます。

③ 過期待とは、先のことばかり、気になり、実態にそぐわない考え方が先行しすぎる傾向が根底にあります。

さらに、この子のおかげで、親という役割を持てることに感謝する気持ちが低下しています。具体的には「期待の掛け過ぎ、ほめなさすぎ、できて当たり前」となって現れます。
その結果、子どもは次第に自信のない無気力な方向に進むことになります。

④ 過放任とは、根底に愛の不足と親としての義務の放棄があります。「そんなこといちいち聞くんじゃない、勝手にしろ」というような対応です。具体的には任せすぎ、手抜きのしすぎとなって現れます。愛と注目の欠如は乱暴で冷淡、自分勝手な子になってしまいます。

⑤ 過許可とは根底に親としての認識不足による信頼の与えすぎと、親の義務の放棄があります。具体的には「許可の与えすぎとお金の与えすぎ」となって現れます。共働きの親が祖父母に子どもを見てもらっているケースに良くあります。その結果自制心や忍耐力のないわがままな子になってしまいます。

この５つに共通する特徴の第一は、愛と注目、承認の不足や欠如、二番目には**選択や決断の大部分に親がかかわり、「授受の喜びや挫折の体験」が少ないこと**にあります。
三番目には、否定、支持、命令、禁止、比較、差別、無関心などの態度が言葉となって現れ、受け手の子どもには、不快な感情が習慣化しやすいのです。
（以上、「過ぎたる親のかかわり」成功する子育ての条件より）

そこで、次にこの事について掘り下げてみましょう。
子どもが習い事をする時に、いつも送り迎えをしてあげることが大切だと思っている親がいるとします。今、危険な世の中になってしまいましたので、このことは必要なのかもしれませんが、安全が確保できた上で、それを子どもが望んでいなければ、過干渉になるということを考えなければなりません。

子どもは友達と一緒に行きたいのかもしれません。その途中の友達との会話、つながり、そのようなものを求めている時期かもしれない、道草をしたいのかもしれない、そういうことをわかっていてほしいのです。そのことをわかっていて、危険性とか、今の世の中のことを考慮してあげることは、親として、とても大切なことです。でも、子どもが、今どのような状態でいるかは、把握しておく必要があると思うのです。

だから、親や教師が先に先に行動することが問題なのです。過干渉になるか、ちょうど良い保護になるかは子どもがどう望むか、子どもが次にどうするかにかかっているのです。子どもがそれを望んでいればちょうど良い保護ですが、それを望んでいなければ、子どもに嫌がられるか、いやいや子どもが従っているのです。だから、大人が子どもの行動をしっかり見ていることがポイントなのです。

反対に、過干渉のあまり、小さい時から、親が望んでいることをすることが喜びになっている子どもがいます。親から、何かされることがあたりまえになってしまっているのです。お母さんが、先に何でもしてしまい、結論を出すのに慣れているので、母さんがすることがすべて正しいのです。そうすると、お母さんが喜んでくれる、

お父さんが誉めてくれることだけに関心がいくようになります。

こうするとお母さんが喜んでくれる、お父さんが誉めてくれるという反応だけ見て行動をとっていると、その結果、相手の反応を見てからでないと行動が取れない大人になります。

本当に自分が何をしたいのか、何を望んでいるのか、自分でわからなくなります。相手の反応だけを見てしか行動が取れないと、相手の承認を求めて、どういう答えが正解か、相手が望む正解だけを求めて、誉められる答えだけを求めて、苦しむことになります。

又、誉められないと、愛されてないような気がして相手のご機嫌を伺うようになります。相手が普通にしていても、冷たくされたと感じて、いじけたり、引きこもったりします。そして愛を求めて何かをするので、その見返りがないと「私がこんなにしてあげたのに」とうらむようにもなったりします。

だから、過干渉が一番怖いのです。特に過干渉のつけは青年期などのあとになってやってきます。おもちゃをほしいと泣きじゃくっているときも本当にほしいのはおもちゃかどうかということにもつながりますね。

本当はお母さんに甘えたいだけなのかもしれません。

気持ちをわかってという表れかもしれません。十分甘えが足りて、満足すると子どもは自立するのだといわれています。

そういう意味で、佐々木正美先生は著書「過保護のすすめ」で、こどもが本当に望んでいることを、望んでいるときに、望んでいるだけ与えることはとても難しい、だから、少し過保護くらいでちょうどいいともおっしゃっています。

これが、本当に子どもが望むことを全部やっていいの？という答えになります。

子どもが何を本当に望んでいるのか、それを本当に望んでいるのか、望んでいないのか、子どもの心持ち、行動しだいで、保護が過干渉になるのです。

親がどうしたかの結果はそのとき子どもがどう望んでいたかで変わるのです。だから、大切なことはそのことを感じる力が大人にないと上手くいかないのですね。

だから子どもの行動を見ずに、大人が先に先に行動を規制したり、体験を排除するのが子どもの将来にとっては困るのです。辛い苦しい悲しい体験も、嬉しい体験と共に必要なのです。

つらい、苦しい、悲しい体験をしたからこそ、相手にも優しくなれます。自分の気持ちをわかってもらうためには相手の気持ちもわからないと自分が楽しめないのです。だから、子どもの中でのルールができるのです。ルールを守ろうとするのです。

小さなつらい、苦しい、悲しい体験を乗り越えたからこそ、大きな体験を乗り越えるすべも見えてくるしそれを乗り越えようとする勇気もわいてくるのです。

そしてその乗り越える勇気の源は乳幼児期に十分愛されたという原風景でもあるのです。いつまでも過保護にしてほしいというのでは困りますが、親に十分愛されたと感じたなら自分から自立していくのです。愛され足りないから「もっと、もっと愛して」と甘えが続くのです。

こちらが、子どもに何を望んでいるかも考えてみることが大切であると佐々木先生は言っておられます。これは過期待につながると私は考えます。

では、次に私達大人が、子どもに期待していることとはいったい何なのでしょうか？今から、子どもに期待することを紙面に正直に書き出してみましょう。

いくつありましたか？思うままに書いていると、百はゆうに超えてしまいます。子どもにあまり期待などしていませんという方でも、書き出してみるとたくさんあることに気づかれるでしょう。大きな項目では、友人に好かれる子になってほしい、思いやりがある子に育ってほしい、小さなことをあげたら、靴は脱ぐ、服はたたんでほしい、数えたら望んでいることは数え切れません。では、その期待は誰の期待でしょうか。子どもが望んでいることでしょうか。子どもの自分への期待でしょうか？違いますね。それは親の期待ではないですか？　親の理想ではないですか？

ところが、子どもは、その理想どおりになることを親が望むと愛されていないと感じるのです。親が子どものことを思って、期待をすればするほど、愛されていないと感じるのです。なぜなら、理想を押し付けるのは、「今のあなたではなく、親の理想どおりになったら愛してあげますよ」といっていることだからです。

こうなったら愛してあげる、こうならないと愛してあげないという、裏のメッセージが伝わるのです。条件付のメッセージになっているのです。

そして、その親の期待に答えるために、子どもは本当に自分がやりたいことを制限してしまうか、反対に親に隠れてやりたいことをやるという二面性をもつ事になります。

そして、親は自分が見ている子どもの姿が子どもの本当の姿だと思い込んで安心しているだけなのです。それでは本当の子どもの心を理解し、援助は出来ません。だから、この無条件の愛というのは、難しいのですね。

私は無条件の愛について考えるとき、いつも「一杯の掛けそば」の話を思い出します。
もう廃れてしまったお話ですので、知らない方もあるかと思いますのでおおかたのあらすじを書きましょう。

一軒のそば屋がありました。毎年暮れになると、一組の親子がやってきて、かけそばを一杯だけ注文するのです。それを親子で分け合って食べて、幸せそうに帰っていくのです。
このことが何年か続き、ある年から、この親子はそば屋にやってこなくなります。そして幾年か後、立派に成長

した息子とお母さんがこのそば屋に挨拶に来るのです。それ以後、このそば屋では、この親子が座った席を幸福の席と名づけたそうです

なぜ、この話が感動的であったのでしょうか。どこが感動的であったと思いますか？

それは、「分け合った」いうところにあると私は思うのです。日本人的な考えでいけば、「お母さんはいいからあなたが全部お食べなさい」と言うかもしれません。それは、すごい愛情に一見、見えるかもしれません。自分は飢えても、子どもに食べさせるという感動的な・・・・でもその裏には、お母さんはこんなにしてあげたのだから、という思いがあるかもしれません。仮にお母さんになくても、子どもは、お返しにお母さんのために何かしなくてはと考えたかもしれません。子どもには自分だけ食べるという負い目が残ったかもしれません。

この話が、本当にそうだったのかは定かではありませんが、それでは、決して無条件ではないような気がするのです。たとえ少ない量でも、お母さんもあなたも飢えない、私も半分食べる、あなたも半分食べる、これこそが、究極の無条件の愛なのではないかという気が私はするのです、だから感動したのだろうと思うのですが、いかがでしょうか。

さて、この５つの過ぎたる関わりを打破する方法が「セルフコントロールできる子どもに育てること」にあると私は考えます。

子どもが自分で決めるということはとても大切なことで、いつ自分で決めるのかも含めて子どもに任せて待っていてあげるところに子どもの自主性が育ちます。

吉塚幼稚園の教育では「自己選択→決断→承認→自信→自他分離→個別性→共感→自立」の教育の循環を通して、真に自立し、自分の事が大好きな子ども達を育てていきます。この教育は日々の保育だけでなく、子ども達が自ら選択、決定し、自己承認が出来る自主選択保育「ドリカムタイム」や子ども達の感覚の鋭敏性、創造力、考える力、柔軟性、感性を培い、視野を広げる、遊びの自由広場「キラキラタワー」でのその年齢に不可欠の子ども達の望ましい成長と発達を促す教育にも繋がっています。

自己決定力を身につける、即ち、自分で自分を律する（セルフコントロールできる）ことが出来れば、人は切

れません。自分で決めるためには、大切なことを自分の今の感情に気づいて、自分で決めるという体験をすることが必要です。いつするかも含めて、自分で決めていいとなると、自分の衝動や欲求を抑制したり、先延ばしにしたり自分で出来るようになって行きます。

この「セルフコントロールできる子どもに育てること」の課題は、友達とのかかわりの中で育つことがもっとも大切です。エリクソンは子どもが人格形成をする過程でもっとも大切なことは、「友達から学ぶこと」であるといっています。

佐々木先生はこれを「親や教師やその他の大人たちから教えられたことを、そのままの形ではなく、仲間と共有しあい、咀嚼しあって始めて人間的な能力にすることが出来る」また、「子どもの自立とは自分ひとりで何でも出来ることではなく、友達に寄りかかったり、友達を支えることで、程よいバランスを保てることにある」とおっしゃっています。

親や、教師から教えられた知識も技術も、スポーツも、ピアノも、習い事もすべて、友達との共感的な交流によって始めて人間的な資質や能力となるというわけです。すなわち、どんな能力も、単に教えられたとおりに身に付けるだけでは、人間性や人格には変化を及ぼさないのです。

ピアノが上手でも、何かが特に秀でていても人間関係が築けていない人もいます。そんな子は、仲間と共感してグループで楽しむことが出来ていないのです。上手にさせたいばかりにその余裕を親が与えていないこともあります。知識や技術を身に付けても、人を信頼する感情が育っていなかったら、子どもは本当の自立の第一歩は踏み出せません。何かが上手になっても何の意味もないのです。

信頼するとは「信じて頼ること」。友達を信じることが出来るから頼ることが出来るのです。信じているからけんかも出来るのです。教えることが出来て、教えてもらうことが出来る関係です。人に依存し、依存されるのが、自立の一歩です。人を信じる力がしっかりしていれば、人を頼ることができるし、人に頼られることができます。そして自立の第一歩を踏み出すのです。友達が信じられるかどうかは親が信じられるかどうかにあります。だから親のかかわりが根底で大切なのですね。これは親代わりの人でもいいと思うのです。

心理学者、エリクソンの言う「友達から学ばなければならない」とはこのことです。
まさに、吉塚幼稚園の自立の考え方、教育の循環の根幹もこのエリクソンの発達レベルに相応しているということになります。
さて、子どもへの親の関わりを見てきました。
子どもの発達に大きな関心を抱いた心理学者エリクソンは人間の子どもが学習し克服しなければならない発達課

題は、母親を通して周囲の人々や世界に対する絶対的な信頼感であると指摘しています。

『この時期に母親を絶対的に信頼することを実体験し得なかった子どもは、その後ずっと、自分の生きる世界やそこにいる人々に対して、基本的な信頼の感情をはぐくみ得ないまま成長していくのではないか。

親にこのような育て方をされた子どもは、劣等感を持ち、目的もしっかりもてない。ただ八方美人で周囲に迎合してしまう、ただ周囲の人に気にいられたいと思ってしまう。

周囲の人から不愉快な顔をされるとおびえて、どんな嫌なことでも体に鞭を打ってしまう。彼らは周囲の人から責められて生きてきた。だから、責められていなくても、責められていると感じてしまうようになる。このような人の努力は自分の本性を否定する努力だから、努力すればするほど、消耗し、生きるエネルギーを失う。こういう人には愛がない。何をするにも見返りを求めている。

そして、マイナスの発想をする。人がマイナスの発想をするのは「私はこんなにつらい。それでも頑張っている。そんなあなたはえらい。すごいと認めてもらいたいからである。その奥にだから私を愛してという魂の叫びがある。愛情飢餓感がマイナスの発想の原点なのである。決して問題解決を求めて入るのではない、ただ認めて、愛してといっているだけなのである。その気持ちをわかってあげれば、「そうがんばったね」とわかってあげればいいのである。

生きることがつらくなった人は周囲への憎しみ、恨み、敵意、恐怖、不安といったあらゆるマイナスの感情を惨めさで訴える。日ごろの憎しみの感情をストレートに吐き出せないので、傷ついたという惨めさを誇張することで根雪のようにたまった憎しみの感情を吐き出そうとしているのである。そのことでマイナスの感情を訴えているのである。でもそれが小さい頃から、愛されることがなかった無念の気持ちの現れと理解してくれる人はいない。周囲の人から見れば、傲慢な人に写るけれど、生い立ちという視点からすれば、本当に同情すべき人なのである。だから、過干渉、過期待が怖いのである。』

又、昔の子どもは、叱られる事が予期出来ていたのに、育児不安の親からは、いつ、叱られたり、罵倒されたりするのかわからないので、子どもも不安で怯えていて、子ども自身が不安で、すぐ、切れる子どもになるといわれています。

親子の対話、それも、体を使った対話をする事が、今、とても大事だと私は考えています。
命を大切にする心も、ものを大切にすることも、言葉だけでは実感する事ができない事を、心で感じ、体で覚えていく事が大切だと思います。頭で理解できていても、心で感じ、体で覚えていかなくては、本当に理解している事にはならないからです。頭の中の考えと体の感じが一体化していないという事は真の理解には至っていない事と同じだと思います。

今、大切な事は、子どもと向き合って、一生懸命家庭教育をしてほしいということです。それは、当然のごとくお金で教育を与えたり、物質的に豊かにしてあげるという事ではありません。この不景気の中で、お金では買えない喜びがあります。

又、悲しいことに、子どもを取り巻く「三つの間」が減ってきているということです。
「時間・空間・仲間」の三つの間が減ってきているのです。その結果として、体験するということが極端に減っています。子ども達にとって、大切な体験を、大人が先に先に摘み取ってしまっているということもあります。家庭で、小さな怪我を何も経験してこない子どもは、集団生活に入ったとたん、転び方、よけ方が判らず、大きな怪我をするということがあります。小さな怪我は大きな怪我を未然に防ぐ為には、必要な経験なのに、その経験がないから、大きな怪我に繋がっているのかもしれません。痛みを知らない子どもは、平気で、お友達をたたきます。だから、子ども達の将来を考えると必要な体験を大人が先に先に摘み取ってしまうことに危惧を感じます。

子どもにとって良かれと思ってしている大人の行為が子どもをひ弱で、ダメにしていくのかもしれません。今の子ども達には、その年齢に不可欠な体験が必要です。そのためにも、幼稚園では体験教育を大切に進めていますが、ご家庭でも、共に体を動かす事から始めてください。草取りでも、雑巾がけでも、何でもいいと思います。親子で共にすることに意味があるのです。だからこそ、親子が触れ合える夏休み、冬休みなどの休みが必要なのだと思います、ここに又、幼稚園の存在意義もあると私は考えます。最終的に子どもの心をつかめるのは親子の姿からだけなのです。

次に、子どもが育つのに、何が大切かというと、自分の人生に対して自信を持つという事です。どんな子どもにも、この世の中に生きている価値があります。親が子どもを愛するという事は他人はどうであれ、親は我が子には「だいすきだよ」等と言い続けて、生きる価値を認めることです。そうすると、子どもは、自分に自信を持って生きていく事が出来ます。
自分の生きる存在が認められた時に、初めて人も認められるのです。

又、今の若い学生の傾向を見るとき、対面の会話より、携帯電話の方が長時間表情豊かにしゃべっているという現実があります。これは、携帯電話やメールの方が、気が楽だからでしょう。
現代は、子どもの数も減ってきて、一人、一室の時代になり、自己中心の生活で、多人数と生活していないから、人と長時間向き合う事が苦痛になってきているのです。それが、学級崩壊の原因の一つでもあります。人間関係が作れなくなってきている傾向にあります。

地域社会も人間関係の絆が除々に崩壊しつつあります。大人はもう一度、子どもの為だけではなく、人間として生きた関係を回復する為に、再び人間関係を構築しないと子どもの人間関係は豊かになることはありません。地域社会、学校、会社、大人の人間関係が希薄になってきていることをまず、自覚する必要があると思います。

今までの文化をもう一度見直す時期にきていると思います。そして、この課題は、子どもをとりまく、全ての

人が手を繋いで協力してやらないと難しい問題だともいえます。
　どうか、これからも、保護者の方に、この課題に関心を持ち続けてほしいと願っています。

　私達は、これからの子育てで同じような過ちをしないように共に学んできました。しかし私が教育相談で子育てに悩んでいる保護者の方と向き合ったとき、保護者の方自身の育ちに目が向くことが多いのも事実です。
　では、最後に、親の５つの過ぎたる関わりを受けて、もうすでに大人になってしまったお父さんやお母さんはどうしたらいいの？　ということです。

　エリクソンの言うように一生基本的な信頼感を持たないまま一生過ごすのでしょうか。そして永久に苦しみ続けるのでしょうか。
「魔女の法則」という言葉もあります。過去を否定することによって同じ体験を繰り返してしまうことを言います。たとえば、親の養育態度が自己否定で、不満やイライラが多く、子どもへの期待が大きくて、放任か、厳しすぎて、ストレスがたまった母親がいたとします。

　子どもである自分はそれが嫌だったのです。そして、自分が母親になったとき、この子だけは自分と違った育て方をしなければと思いながらも、母親は自分の過去を取り戻そうとして同じ事を繰り返してしまうということを言います。

　そういうことは繰り返されることも確かでしょう。でも、みんなが、そうでしょうか。私はそうは思いません。確かに幼児虐待も含めてこういうこともあるでしょう。でも、少なくとも、皆さんは、そういうことがあると言うことを、私と一緒に学びました、だからそういうことがあるのだということをわかっていればいいと思うのです。気づいていれば防ぐことが出来ます。人が気づいているか否かということには天地の差があります。

　又、こんなこともいわれています。人は過去で自分が見たくない事実を感情の奥底に抑圧してみないようにするということを無意識の中でします。そしてそれを、禁止令として体に刻み込むのです。
　私自身が、過去に経験したことがたくさんあります。つらい経験が多かった私は、つらいことをつらいことと感じると生きていけなかったので、感じることを抑圧していました。そして「感じてはいけない」という禁止令を刻み込んだのです。
又、若くして園長になった私は、頑張らなければいけないという気持ちが強く、人生を楽しむということを抑圧して、「楽しんではいけない」という禁止令を刻み込んだのです。

　私は、心理学に出会い、この抑圧から解放されることが出来ましたが、幼時決断としてこんな例が他にもたくさんあります。

病気になると親に優しされるという体験を重ねると「健康でいるな」
この子どもは要らなかったという思いで親にそだてられると「存在してはいけない」
男の子だったら良かったのにと男の子を望んでいるという思いで育てられると「女であるな」
期待を過度に持って、能力以上に頑張ってほしいという思いで育てられると
「遊んではいけない、さぼってはいけない」
母親の支持や命令的な対応で育てると、
「大人になってはいけない」
子どもの行動の前に心配しすぎて、やらせないと
「自分で行動すると失敗するぞ」
愛情表現が少ないと
「人を信用すると裏切られるので、親しくするな」
好奇心や、知識欲を否定して育てると、
「学んではいけない、考えてはいけない」
親の権威や支配性が強いと
「重要な位置にはいないようにしろ」
という禁止令を刻んでいることがあります。例を挙げればきりがありません。
もちろんこれが、有効に働いているという面があることも忘れてはなりません。 このような思いや、考えが、今の自分を支えてきたことは紛れもないことだからです。でも、もし、その考えが、自分を苦しめていることがあったらその思いから開放してあげたいものです。

では、どうしたらいいのでしょうか？

過去を顧みることはとても重要なことです。しかし過ぎ去った過去は取り戻せません。むしろ、新たなスタートラインに立つことが大切です。しかも、誰しも完璧な親に育てられたわけではありません。その上、自分の親も、祖父母に影響を受けた上での、子育てであったのかもしれないということは容易に想像がつくことです。そのことに気づけたとき、親の養育態度に対しても、許すことが出来るのです。

自己実現は一生です。今日も明日も、いくつになっても成長することは出来ます。一生、人間は生涯教育です。変えることの出来ない過去をどうするかではなく、今をどう生きるかであろうと思います。「今ここに生きること」を精一杯実現すればそれがやがて、いえその瞬間に過去に未来になります。

だから、私達に子育てという仕事が任されているのだと思います。親が完璧になっているのを待っていたら、一生子育てなんか出来ません。人は親になることで、もう一度、自分が通り過ぎなかった発達レベルを繰り返し体験することが出来るのです。人は親になることで人間にもう一度なるのです。いえ、本当の人間になるのです、といったらいいすぎでしょうか？［子育ては自分育てである］ことのゆえんは、ここにあります。

子育ては自分が成長するまたとないチャンスです。子どもを生み、子どもを愛し、自己肯定観を持つようにサポートするプロセスはまさに、再度、親自身が自分を愛し、自分に自己肯定感を持つためのプロセスです。

愛されずに育った人も、自分が子どもを愛し、子どもに愛されることによって自分を愛することが出来るのです。子ども達は、私達、親を育てるために、私達のところに生まれてきたのですよ。おかあさん。

だから、自分に自信がもてないおかあさん、自分を認められないおかあさん、いつも不安なおかあさん、そして自分が好きになれないおかあさん。だから、心配しないで。自分の人生の生きなおしをしましょう、もう一度。子育てを通して。

だからこそ、人生に遅いことは何もないのです。子育てにも手遅れということはないのです。気づいた、今から歩き出しましょう。

気づけないより、何より気づいたことが、一番の宝なのですから。勇気を持って・・・・

一緒に育ちましょう。子ども達と共に、

この吉塚幼稚園で・・・・。